
血に魅せられた者

神崎泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血に魅せられた者

【Nコード】

N5011E

【作者名】

神崎泉

【あらすじ】

血に魅せられた者：主人公は、小さいときから残酷な少年だった…だが、それを隠して生きてきた彼の空想はより現実味を帯びていく…そして、最後には――

(前書き)

グロイ描写が多いですが、それを承知の上で読んで下さい。

血。

俺は血が好きだ。

赤く、どろどろとしていてなぜか人を魅了する力を秘めている。

俺も血の虜になった一人。

血、血、血…俺は常に心の何処かで血を求めている。

自分の心が他の人より可笑しいのには気が付いていた。

始めに気が付いたのは、小学4年生の時。

学校の校門に野良犬の死体があった日だった。

冬だったため寒さに耐えきれずに死んだのだろう。

犬は冷たくなり、動いてはいない。

見るからに死んでいると分かった。

みんな犬を避けて歩く。

だが、俺は犬に近づきさわった。

冷たくて…冷たくて…ココチイイ…

「…ええーさわれるの？私、無理」

女の子が一人、俺を見てそう言った。

周囲の視線は俺に集まり、俺を珍しそうな目で見た。

そう、そのとき気が付いたのだ。

自分は異質だと…

それから俺は自分は他の人と違うと言うことを隠し、生きてきた。

人が気味悪がるような物に興味を持ったが、なぜかわからないままだった。

そして、気が付いていた。

将来的に自分が加害者になることに…

「ああ、授業とかやってられねえよ。」

表向きで友達として接している幸野が言った。

「そーだな。」

俺は基本冷めた反応しかしないがみんな俺がクールだと解釈しているようだ。

自分を偽り、普通の人間を演じる俺にみんな気が付いていない。

そう、所詮そんなものなのだ。

外を見上げて空を見る。

眩しいくらいの快晴だ。

太陽がムカツクくらいさんさんと輝き暑い。

こんな良い天気の中頭の隅では誰かが誰かを殺すことを想像する。

ナイフで刺し、血が吹き出る。

内蔵が飛び散り、右目がえぐられ：

頭の中の殺人はよりリアルに、鮮明に：

よりグロク面白く：

そう、思うのだった。

しかし、ソレが全ての過ちだったのだ：

授業は基本上の空で、だいたい頭の中で人を殺す。

毎日俺の空想で沢山の人間が死んでいく。

殺し方のアイデアは無限に俺の底からわき上がってくる。

「キヤー」

そう、喚け、叫べ、怯え逃げまどえ。

…しかし、気が付くとその声は空想ではなく現実のものだった。

「落ち着け！カッターをしまうんだ。」

先生がそう言って俺をなだめている真っ最中だった。

「…俺…。」

俺は取り返しの付かないことをしてしまった。

俺…

分かっていた。

いつか、こんな日が来るような気がしていた。

見なかっただけ。

そう、嘘だと信じたくなかっただけ…

その日のことは先生が俺の体調が悪くて意識が朦朧としていてああいうことになってしまったことにした。

学校として、生徒がそう言うことをしたのを認めたくないのだろう。

しかし、きっと俺はもうダメだ。

空想で人を殺す。

頭の中の殺人はよりリアルに、鮮明に…

よりグロク面白く…

そう…リアルに…

最近気が付くと空想で人を殺している。

前はコントロール出来たのに…

その日はいつも通りに訪れた。

いつも通り表向きだけいい顔をして、授業をボーッと聞き流す。

今日はどうやって殺そう。

そうだな…気分的には残酷で残虐で卑劣な殺し方が良い。

まずは、ナイフで腹を刺す。

血が相手の服に赤い染みを作っていく。

美しい―

そして、次はその腹に空いた穴を大きく広げ、内蔵をえぐり出す。

肝臓、腎臓、胃、小腸、大腸、…

沢山の鮮血で染まる内臓を一つ一つえぐる。

背筋がゾクゾクつとして、体中を快感が駆けめぐる。

真っ赤な内蔵はまたナイフでちっさく切って、大切にビニール袋にしまっていく。

キンコンカンコン

チャイムが鳴り、俺は反射的に現実に戻った…ハズだった。

しかし、目の前には真っ赤な血の水たまりが広がり、沢山の見慣れた人間が形を形成することなく内蔵を出して死んでいた。

そう、俺の想像と同じ状態で…

「ああ、俺、ついにやっちゃったんだ。」

俺は笑顔でそう笑い、空想に戻った。

今度は、顔に触れてみる。

恐怖で歪んだ顔。

この表情にこそられる…

俺はナイフで頭の皮膚を器用に剥いで、あらわになった脳に手を突っ込んだ。

グシュツ

脳はに手を突っ込みかき混ぜるとそんな音がした。

脳は思いの他柔らかく生温かくて気持ちいい。

脳にナイフで切れ込みを入れて、中の血を見る。

綺麗な鮮血…

俺はその血を見て微笑んだ。

今度は脳を頭から切り離し手に持ってみる。

ぶるんぶるんして気持ちの良い脳を思いっきり握ってみた。

まるで、プリンのように脳はあっさりぐしゃぐしゃになった。

脳の残骸を制服で拭い、今度は目に注目した。

恐怖で大きく見開かれた目に手を突っ込んでみる。

どろりとした液体と共に目玉がコロンと出てきた。

神経がまだ繋がっている。

神経を切って目玉を手のにせてみる。

暫く手の上で転がせて遊んで、ナイフで刺してみた。

綺麗に二つに割れた目を投げ、今度は耳。

耳をナイフで頭からそぎ落としてみた。

しかし、耳なんかもっても特にすることもないので切り刻んで投げた。

今度は…そうだなー。

頭の真ん中にナイフを通してみた。

堅かった物の、チェーンソーで切りとれた。

しかし、頭を二つにすると沢山隙間が空いているだけであまり面白くない。

俺はすることが無くなったので全てを白紙に戻した。

しかし、戻るはずがなかった。

教室は血の海で、血の生臭い匂いで充満し、その辺には躰のあらゆるパーツが無造作に置いてある。

俺はその中をスキップで歩く。

もう、学校の生徒と先生はみんな死んでしまっただろう。

そう、俺はもう空想と現実の区別がつかなくなったのだ。

よりリアルに：

そんな思いがそうさせたのかも知れない。

しかし、空想を止めてしまったら俺は生きていけないのだ。

俺は毎日空想する。

鮮やかな血、生温かい内臓、恐怖に歪んだ表情に、冷たい死体：

全てが俺を魅了する。

俺は全ての虜になる。

俺はこうして壊れて行った――

(後書き)

コレは衝動的に書いた小説です。

とにかくグロイのが書きたかった時代。

恐らく授業中に書いたであろいうネタです。

残酷な少年はもちろん俺をモチーフに書きました。

まあ、此処まで残酷ではないですが…

友人に将来人を殺しそうって言われる今日この頃。恐らくこういう小説を書くのが原因だと気がつき始めたついこの前…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5011e/>

血に魅せられた者

2011年10月5日00時36分発行